



建学の精神

校訓の「心を清め、人に仕えよ」は、聖書の言葉からとられたものです。学院の教育が目指す人間像を言い表わしたものです。神からの問いかけに対して、人間が責任を自覚しながら応えて生きる存在であることを表わしています。自由に、そして誠実に自分の能力を自分と隣人とのために用いることができるような人になるように、という学院の教育目標が表わされています。

また、教育の方針には「神を畏れる」「自立する」「隣人と共に生きる」という三つの教育基本方針を掲げています。



横浜英和学院 校章・マーク
蒔田の丘に自生していた花、あやめを図案化したものです。1996年度の校名変更の際、卒業生で多摩美術大学出身のグラフィックデザイナー石川哉子のデザインが、公募により採用されました。

学校法人 横浜英和学院

〒232-8580 神奈川県横浜市南区蒔田町124

TEL : 045-731-1901 FAX : 045-712-8773



創立

横浜英和学院は、1880年(明治13)10月28日に〈ブリテン女学校〉として、アメリカの美普教会(The Methodist Protestant Church)の援助によって始まりました。美普教会は小さな団体でしたので、当初、ミッションボードを持っていませんでした。しかしアメリカ婦人一致外国伝道協会(The Woman's Union Missionary Society: WUMS)からインドに派遣されていたエリザベス・ガスリーが帰国の途上で日本に立ち寄り、横浜のミッションホームで欧亜系の混血児の世話をし、これを帰国後に報告したことから婦人外国伝道会が結成されました。美普教会はそれまでWUMSを通じてミッションホームを支援してきましたが、ガスリーを宣教師として派遣し、新たな学校をつくることになりました。しかし、ガスリーは日本に出発するために向かったサンフランシスコで肺炎にかかり亡くなってしまいます。そこで、インド・カルカッタのミッションホームでガスリーと一緒に働いた経験もあったハリエット・G・ブリテンが日本に派遣されることになりました。

山手居留地四十八番館に開校したブリテン女学校は、女学校という名前になっていますが、3分の1は男子だったといいます。通訳兼助手としてフェリス女学院出身の原田良子を引き合わせるなど、バラ宣教師も助力しています。ちなみに原田の辞職後は、ミッションホームでの奨学金の最初の受給者 根津えい子が後任に就きました。

ブリテンはインドで20年もの宣教の実績を持ったベテランでしたが、アメリカ聖公会の教会員であり、正式な高等教育や神学教育を受けていませんでした。そこへ派遣されたのが26歳の若き宣教師フレデリック・C・クラインです。年齢差の大きい、ブリテンとクラインは学校経営と伝道において相容れない価値観を持っていました。1885年(明治18)ブリテンは退任し、翌年、校名と組織を変更し、クラインが男子部の横浜英和学校、マーガレット・ブラウンが女子部の横浜英和女学校の校長に就任しています。

1939年(昭和14)戦時色が強くなり、英和という名を排し〈成美学園〉と改名しますが、1996年(平成8)再び英和を掲げる校名〈横浜英和学院〉となりました。



創立者 H.G. Brittan (1822~1897年)
「きかずして信ずることが出来ようか」



創立の背景と歴史

ブリテンは超教派の伝道組織であるWUMSから、インドに派遣されて大きな成果を上げたベテランでした。イギリスで生まれ、幼ないときに両親とアメリカに移住。不幸なことに児童期に転落事故を起こして身体の自由を失いました。18歳になり歩けるようになりますが、歩行には障害が残りました。しかし、強い伝道の意志を持ったブリテンはアフリカに向かいます。同じ宣教師と婚約しますが、熱病にかかって本国に送還されることになりました。一緒に帰国を願う婚約者に、己の責務を自分のために捨てることのないように諭して、ブリテンは帰国。かの地での経験を、のちの活動に貢献する内容の冊子にまとめています。

次にブリテンはインドに向かいました。優れた裁縫技術を持っていた彼女は、閉じこもった部屋から外に出る習慣がないインドの上流婦人と親しく接する機会を上手につくる才能がありました。医療訓練も受け、寄付集めのための音楽会を催す術にも長けていました。アフリカ、インド、日本にと75年の生涯のうち、ほぼ50年を宣教に捧げた偉大な女性宣教師のパイオニアと称されました。1880年ごろにはWUMSから離れていました。

WUMSは、1861年、実業家の夫人であったドリーマスによって創立されました。この年に、アメリカでは南北戦争が起きています。社会の転換期にあたり、社会改革活動が盛んに行なわれました。ドリーマス夫人はニューヨーク婦人刑務所協会の副会長も務め、19世紀アメリカにおける既婚女性の理想像ともなっていたのです。

ブリテン女学校の母体となった美普教会は、本国ではThe Methodist Protestant Churchと呼ばれており、ウエスレーを創始者とする点、教義においてはメソジスト監督教会と同じです。ただし、教会政治、立法の権限がすべて教職にあるとするメソジスト監督教会の在り方に疑問を呈し、教職も信徒も平等で、監督や長老を設けずに教会政治を行なう教会として、1828年〈アソシエテッド・メソジスト教会〉を立ち上げ、2年後に分離、独立しました。

小さい会派である美普教会にとって、独自に海外伝道を行なうことは大きな負担になりました。教会内部では、絶えず海外伝道の必要性に疑問が投げかけられたといいます。婦人外国伝道局に続いて男性中心の外国伝道局ができました。外国伝道局派遣のクラインはブリテン女学校を改組し、外国伝道局の所属を男子の横浜英和学校、婦人外国伝道局の所属を横浜英和女学校とし、校舎も分けました。

辞任後のブリテンは東京の長老教会の女学校で半年間働いたのち、横浜で混血児のための施設を開設しましたが、体調を崩し、帰国しました。やっとのことでサンフランシスコに上陸し、その地のホテルで息を引き取っています。

クラインは尾上町に夜間英語学校を興し、この場所で1886年(明治19)横浜第一美普教会(のちに本牧に移転。横浜本牧教会の前身)が始まりました。クラインは美普教会で最初の聖職に任命された宣教師であり、後任をカルハー神学博士夫妻に託し、名古屋で愛知英語学校(現・名古屋学院)の初代校長となっています。卒業生であった有島武郎が『一房の葡萄』で描いたのは、ブラウンと同時期に在職したミス・クリテンデンがモデルといわれています。